

スキャンダル捜査が本格化

夏に入って、各種のスキャンダル捜査が本格化してきた。ほとんどがこのコラムで扱った事件だが、一つだけ新しい事件捜査もある。それらを解説しておこう。

モスクワの商務代表部不動産売却事件

この事件はすでに捜査が開始され、ハンガリーでは容疑者が逮捕・拘留されているが、モスクワからの情報ではロシアでもこの不動産売買にかんする捜査が始まった。

この事件はロシア政府のトップが絡んでいるスキャンダルだから、ロシアの検察がどこまで真相を掴み、事件を解明できるかはかなり怪しい。しかし、ロシア国会で議員がこの不動産売却について質したことから、検察が動き出した。捜査の対象は、ハンガリー政府からこの不動産を購入し、ロシア政府に売却した **Diamond Air** 社の実質的な所有者のヴェクセルベルグである。もちろん、彼の背後にはプーチンかメドヴェージェフがいるので、捜査が始まったということは、どちらかの勢力を追い落とそうという策略があるとみてよいが、どこかで政治的妥協が図られるから、真相解明を期待することはできない。

近代的な法治国家であれば、この種のスキャンダルが見逃されることはないが、ロシアでは権力の意向を抜きに、この種の犯罪を摘発して容疑者を逮捕することはできない。ヴェクセルベルグへの捜査は、明らかに政治的な臭いを感じさせるが、彼が政治的に切り捨てられた場合にのみ、彼の逮捕がありえよう。

ただ、捜査の過程で新しい事実が明らかにされれば、ハンガリーの容疑者の立場は悪くなる。実際の取引はすべてオフショア企業を介在しているので、お金のやりとりを追跡することがほぼ不可能だが、そのルートのどこかで綻びができれば、解明の糸口が見つかるはずだ。しかし、現在のロシアでそこまで検察が追及できるとは思えない。

シュクローの不動産交換

これもかなり前から話題になっている事件だが、ここに来て前へ進み出した。モスクワ不動産売買の陰の主役はジュルチャーニイ内閣で財務大臣だったヴェレシユ・ヤーノシュだが、シュクローの不動産売買の主役はジュルチャーニイ本人である。

検察庁の要請を受けて、国会は 9 月にジュルチャーニイの国会議員不逮捕権の停止を決議した。社会党はこれを政治的陰謀だとして激しく批判し、ジュルチャーニイはイスラエルからの投資によって雇用を創出しようと考えただけだと、その善意を強調することで政治的陰謀説を振り回している。

社会党が国民から見放された大きな原因の一つが、公的不動産の売買に絡むスキャンダルであることを、社会党の連中はまったく分かっていない。ほとんどの公的不動産の売買には政治家が絡んでいる。表向きの意図とは別に、価値の高い不動産と価値の低い不動産

の交換を容認して、利得をキックバックさせるのは政治家の常套手段の一つ。シュクローにカジノを作って外人客を呼び込み、雇用を促進するという名目で、イスラエルの会社所有の安価な不動産と価値の高い不動産を交換するのを容認したのである。ただ、お金のやりとりは国内で行われていないから、収賄を実証するのはたいへん難しい。したがって、容疑は形式犯罪に留まるだろう。つまり、首相として不適切に公的資産の売却を容認したという責任だけが追及されよう。しかし、それは事の本質ではなく、その背後に巨額のお金の流れていることが問題なのだ。しかし、オフショア企業同士を介在させてリベートをやりとりしているから、この本質が暴けない。政治的陰謀を叫んでいる社会党の議員たちは、本当にジュルチャーニイの説明を信じているのだろうか。もしそうだとしたら、政治家としてきわめてナイーブだし、事の本質が分かっている謀略説を流す者は性質が悪い。

同じような事件として、西駅横の敷地に新しい官庁街を作るというジュルチャーニイ政府の構想がある。頓挫したこのプロジェクトに支出された公金は 1000 億 Ft を超える。成果がゼロのプロジェクトにこれだけのお金が支出された。そのかなりの部分が政治家の関連会社に流れていることを推測するのは難しくない。しかし、ハンガリーの検察の能力では、事件の解明に大きな限界があるだろう。これはオルバン首相が叱咤激励しても、かんたんに打破できるものではない。

こういう案件がなければ、ジュルチャーニイ・フェレンツが現在もなお、自らが役員を務める会社から月々 1000 万 Ft もの役員報酬を得ていることなど理解することは不可能だ。残念ながら、ハンガリーの税務署も検察もそれほど能力が高いとは言えない。

それにしても、このような無駄や公金横領がまかり通ってきたことが、巨額の政府債務の累積を結果してきた。そのことについて、社会党の連中がまったく反省していない。落ちるべくして落ちたと言うべきだろう。

コチシュ・イシュトヴァン

BKV（ブダペスト交通公社）社長のコチシュ・イシュトヴァンは工科大学教員から体制転換で器用に転身し、いつの間にかハンガリーの公共大企業のトップにたどり着いた人物である。8月に検察はコチシュの事情聴取を行った。そのこともあって、この9月にブダペスト市長はコチシュとの合意を取り付け、BKV社長の退任が決まった。

コチシュの容疑はMVM（ハンガリー電力）社長時代のスキャンダルである。これについて、このコラムで詳しく紹介したが、彼の個人アドバイザーは1990年代から2000年代の各種スキャンダルに名を連ねている悪名高いサース・アンドラーシュである。MVM社長時代に、コチシュはサースと二人三脚で、国外の資産に投資を進めてきた。そのほとんどがMVMの本業とは無関係の投資である。クロアチアのホテルへの投資もその一つだが、巨額の契約金が支払われたのに、実際にはそのホテルをまったく利用することができず、MVMに損失を与えた事件である。これは多くのスキャンダル案件の一つに過ぎず、しかもクロアチアの投資はすべてサース・アンドラーシュが入れ知恵したものだ。支払われたお

金はみなオフショア企業を經由して消えてしまった。これ以外の資金流出事件もみな国外のオフショア企業を介在した取引で、ハンガリーの検察が簡単に捜査できない。ただ、クロアチアのホテルの件だけは、不適切な資金処理が明々白々なので、検察が立件に動いている。

この MVM を舞台とするスキャンダルには、カーダール時代の工業大臣で、体制転換後は実業家として電力分野で大儲けしたカーポイ・ラースローが絡んでいる。カーポイもサース・アンドラーシュも、皆、旧体制時代の秘密警察と政治的コネクションを利用して、体制転換後の公的資産の略奪に知恵を絞ってきた人物である。カーポイは社会党議員団に加わって国会議員の威光をバックに、MVM 所有の Vertes 発電所の民営化で、ただ同然に取得しようとして、最後の最後に頓挫した件が捜査対象になっている。それにもサース・アンドラーシュが絡んでいる。

サース・アンドラーシュはポシュタバンクから融資金を詐取して、それを元手にポシュタバンクの所有権を取得しようとした事件や、ウィーンのハンガリー国立銀行支店の資産流出、ホルン政権時代の秘密警察の無線傍受システムの調達で暗躍してきた人物で、これまで無傷で生き延びてきたこと自体が不思議だ。それほどまでハンガリーの検察の能力は低い。今回のコチシュへの捜査の進展によって、サース・アンドラーシュも事情聴取されているが、これらのフィクサーたちへも本格捜査の手が伸びるのか、それが見所である。

ここに上げた人物は皆、歴代の社会党幹部と深い関係にある者たちで、これまで政治的庇護のもとに公金詐取に精を出してきた連中である。ポシュタバンクの資産流出には社会党のみならず、ほとんどの政党幹部が関係しているから、さすがに FIDESZ も大声を上げていないが、ポシュタバンクの流出資産は 1500 億 Ft (1998 年時点) だった。

こういうように湯水のように公金を垂れ流ししているから、ハンガリーには巨額の債務が積み上がっている。

相互扶助財団スキャンダル

この春から捜査が本格化し、7 月にはジュルチャーニイ内閣の国家諜報部担当大臣だったスィルヴァーシ・ジョルジュの逮捕に至った事件がある。ジュルチャーニイとスィルヴァーシは旧共産主義青年同盟 (KISZ) の幹部時代に知り合った仲で、当時はスィルヴァーシの方が格上だったが、政治家に転身したジュルチャーニイがその才覚を発揮し、内閣を構成した時に、スィルヴァーシを閣僚として迎えた。

児童教育の寄付財団として登録された Egymásért (相互扶助) 財団は 2004 年に設立され、その財団総裁に就任したのが国家警察庁の刑事だったフルデシーサボー・ラースローである。彼は昨年 12 月に密輸容疑で 7 年の懲役刑を受けたが、腑抜けたことに、公判中に廊下に出てそのまま姿を消してしまった。ハンガリーの警察も裁判所もまったく頼りにならない。この 5 月にブダペストに潜伏中のところを逮捕され、現在、拘留されている。その容疑は非営利財団として免税・非課税の商品を大量に輸入し、それを国内の小売り業

者（スーパーマーケット）に流して、不当な利益を得たことである。

これ自体はそれほど珍しい事件ではないが、焦点はこの財団の創設にかかわった人物である。まず、この財団設立のアイデアを出したのは故ナジ・ラヨシュで、体制転換時代の国家保安庁の局長である。彼はその後、ジュルチャーニィの姑であるアプロー・ピロシュカの個人秘書になった。その彼が、旧国家保安庁（秘密警察）や警察庁の退官した上級管理職を役員に据えたこの財団を設立したのである。

このほかに、この財団には怪しげな人物が多くかかわっている。創設者の一人であるヤクビニィ・ロベルト（その息子が現在の財団の代表者）は体制転換前に窃盗で懲役刑に服し、体制転換後は銀行から資金を詐取した容疑で逮捕され懲役に服したが、大統領の恩赦で出所し、その後この財団の創設に加わった。彼もまた警察から指名手配中のところ、この6月にウィーンの空港で逮捕され、ハンガリーに送致された。手配容疑はMOLの株式を不法に取得し、それをロシアの代理人に手渡したことである。MOLの所有権にロシアが手を伸ばし、それをオーストリアのOMVが手助けしている時に、ハンガリー内でもその動きに連動して、MOLの株式をロシア側に手渡したのである。

もう一人のガランボシュ・ラヨシュは2004年にメツジェシ内閣で国家保安庁の局長に任命され、2005年からこの財団の隠れたメンバーになり、2007年からは密輸に深くかかわってきた。

さらに、ラボルツ・シャンドールはソ連のKGBアカデミーを卒業し、1990年代は諜報局が保有していたダミー会社に勤め、2004年からはガランボシュの下で働き、2007年からは彼の後を継いで国家保安庁の局長になった人物である。この6月末の捜査では、スパイ容疑で捜査を受けた。その容疑は「スパイ容疑」とされているだけで、内容は公表されていないが、MOL株の売買にかかわるロシア側への便宜提供を行ったスパイ容疑だと思われる。

7月に入って、スィルヴァーシが同じく「スパイ容疑」で逮捕されたが、裁判所は拘置を認めなかった。

この一連の動きで明らかなように、相互扶助財団とその周辺にはたんに脱税容疑だけでなく、ロシアとの秘密のチャンネルがあると見られている。そこに、ジュルチャーニィ内閣の一員だったスィルヴァーシが親玉としてターゲットになったのである。その糸を辿っていくと、ジュルチャーニィからアプロー・ピロシュカの旧体制人脈にたどり着くのである。

今後の捜査の進展が見ものである。

（関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい）